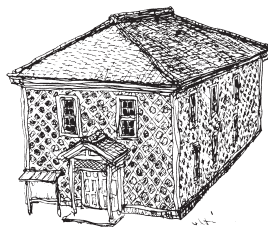


演説館



福澤先生とその門下生たちは、西洋のスピーチ、ディベートを研究し、わが国の「演説」を創始しました。三田演説館は、明治8年に開館した日本最初の演説会堂です。

● 塾長

清家

篤

奴雁の視点で

新入生の皆さん御入学おめでとうございます。慶應義塾では学生、生徒を「塾生」と呼び慣わしています。皆さんが塾生になられたことを、心から歓迎し、お祝いたします。

言うまでもなく慶應義塾にとって何よりも大切な存在は塾生です。私共は日々塾生にとって良いことは何か、を考えて学校運営に当たっています。そしてそれは塾生が慶應義塾に在学中のことだけではありません。むしろ卒業後の人生に何が最も良いかということを考えています。

皆さんが慶應義塾で学んだ効果が、どちらかと言えば人生の後半になるほど大きく出てくる。卒業して時間がたつほど慶應義塾に学んで良かったと思う。そうした学塾が良い学塾と考えているからです。

慶應義塾では大学の卒業生を「塾員」と呼び、大学の卒業式に卒業25年目の塾員、入学式に卒業50年目の塾員をお招きします。毎年たくさんのお塾員が後輩塾生の卒業や入学を祝うために全国各地からわざわざ日吉山上まで足を運んでくださり、最近

では卒業50年目の塾員の方々が日吉記念館から溢れてしまうほどになったため、入学式を午前、午後に分けているほどです。多くの塾員が人生後半になって慶應義塾に学んで良かったと思ってくくださるからこそその光景であり、いつも胸の熱くなる思いです。

教育は目先ではなく、長期的な効用を重視しなければなりません。ここで想起されるのが福澤研究の大家で、慶應連合三田会会長でもあった服部禮次郎氏が好きだと言っておられた、福澤先生の「学者は国の奴雁なり」という言葉です。

奴雁とは、雁の群れが一心に餌を啄ばんでいるときに、一羽首を高く揚げて難に備える番をするものを言うそうです。学者もまた、遠くを見すえ、現状を冷静に分析し、将来のために何が最も良いことを考える者でなければならぬということ、言っておられるわけです。慶應義塾はこれからの奴雁の視点で、塾生の将来にとって何が良いかということを常に考える学塾でありたいと考えています。